満月の夜に

瀬戸内町立西阿室小学校　四年　いのり　悠聖

「ミーン、ミーン、ミーン。」

大きな木にしがみついている小さなせみが、表情一つ変えずに大声で鳴いている。上を見たら、すいこまれそうなほどの真っ青な空。目の前には緑色の葉に、あふれる日の光が入りこんでいるみどり山。そのみどり山にソフトクリームみたいにもこもことのっかっている真っ白な入道雲。じっとしているだけで大つぶのあせがツーッと流れ落ちる。

「暑い。暑すぎる。」

ぼくは橋の手すりにもたれかかり、下を流れる川をのぞきこんだ。とうめいな水の流れがぼくを呼んでいる気がした。階段を下り、こしをかがめて水の中にひじまで入れてみた。「シャキーン」と目が覚めるような気持ち良さだ。

ここは加計呂麻島にある小さな集落。集落の中に川が流れていて、「うなぎ川」というかんばんが立っている。昔から集落の人たちは、この川に住むうなぎを守ってきた。今日は暑いから、うなぎもかくれているだろうなと思いながら、両足を水の中に入れた。

「お願い、助けて。」

手のひらでたっぷりと水をすくって顔を洗おうとしたぼくの耳に、小さな小さな声がとびこんできた。すくっていた水をいっきに川に落とし、声のする方を見た。何も見えない。もう一度水をすくおうと手を水に近づけたとき、ぼくは見つけた。ゆらゆら動く水の中でぼくを見つめる顔を見つけた。

「えっ、まさか……。」

「大変なことが起こってるの。早く来て。」

やっぱりしゃべった。今うなぎがしゃべった。しかも、気付くとぼくの足には、いつの間にかたくさんのうなぎがからみついていて、ぼくの足を動かしている。川の水がぼくのこしまで、むねまで、首までと顔にどんどんせまってきた。大きく息をすいこんで、目をギュッととじたぼくが、次に目を開けたとき見たものは、金色にかがやくこの川の主にちがいない。

「ぼく、どうしてここに。」

「実はあんたにお願いがあるの。明日の満月の夜に起こるわざわいから、みんなを守ってほしいの。」

「わざわいってなに。」

「大津波よ。百年に一度起こる大さい害。それを止めるには、海の中にいるりゅうの右目に私のうろこをはめないといけないの。」

「り、り、りゅうだって。そんなおそろしいこと、ぼくにはできないよ。」
「あなたしかいないの。お願い、みんなを助けて。」
何度もお願いされて、仕方なく引き受けてしまった。大うなぎから金色にかがやく一枚のうろこをわたされたけれど、どうやって目になんかはめるのさ。できるわけない。りゅうに食べられたらどうしよう。そんなことを考えながらねむれない夜をすごした。
次の日の朝、ぼくは、じいちゃんに、海の中にりゅうがいるのか聞いてみた。
「ああ、この海には昔からりゅうが住んでいるって聞いたことがある。でも、百年に一度しか目を覚まさないそうじゃ。」
「じいちゃん、その場所に連れて行って。お願い、お願い、お願い。」
「分かった、分かった。しょうがないなあ。」
じいちゃんは、
「たぶん、この辺だときいたんじゃが。」
と言いながら、船をとめた。金色のうろこをにぎりしめたぼくの心ぞうの音が暗い海にひびく。こわい。でも、あの大うなぎから、「みんなを助けて」とお願いされたことを思い出し、とっさに海に飛びこんでしまった。真っ暗な海。右手にはしっかりと金のうろこをにぎりしめ、きょうふとたたかいながら海の底めがけて泳いだ。回りはほとんど見えないけれど、巨大な岩に着いたようだ。そのとたん、グラグラと岩が動き出した。この岩はりゅうだ。直感でそう思った。急がなきゃ。顔の前まで来たけれど、目は開いていない。ぼくはタイミングを待った。月の光が海の中に差しこみ、海全体が黄色にそまってきた時、急にりゅうの目が開いた。
「今だ。」
ぼくは、持っていた金色のうろこをりゅうの右目におしつけた。金色に光るりゅうの目はさらに光り、体までもが金色になった。体から、「シューシュー」と音もする。生きかえったりゅうは、丸い月めがけていきおいよく飛んだ。いつの間にか始まりかけていた津波は、「ゴゴゴゴーッ」と音を立てて沖の方に引っ張られていった。金色のりゅうが守ってくれたのだ。
ふしぎなことに、このさわぎはぼくの記おくからすっかり消えてしまっていた。ぼくは相変わらず、冷たい川の水につかっている。ふと川の中をのぞくと、一ぴきのうなぎと目があった。あれっ、前にもあったような……。